勝瑞城館跡庭園についての考察 — 枯山水庭園を中心に —

Consideration about the Remains of the Shozui Castle's Gardens —Case Study on its karesansui Garden—

西 桂

Katura Nishi

藍住町勝瑞城館跡調査整備検討委員会専門委員

Specializes in maintenance study of Shozui Castle's in Aizumi Town

Key Words : 1. 三好氏 2. 城館跡庭園 3. 枯山水庭園

1. Miyosi family 2. Garden of the trace castle 3. Karesansui Garden

摘要

徳島県の勝瑞^{しょうずい}は、室町時代後半に、阿波守護細川氏^{あわしゅご}によって守護所が置かれ、戦国時代には、三好氏が本拠とした土地である。「勝瑞城館跡」は、戦国大名三好氏の大規模な居館跡である。平成6年度より発掘調査が始まり、平成11年度に曲輪^{くるわ}のひとつから、枯山水庭園と、北側からは会所跡^{かいしよあと}と思われる建物跡が検出された。庭園は12石を配石した平庭式枯山水庭園である。この庭園の特色とこれらが作庭された背景について考察したい。

Abstract

Shozui in Tokushima is the place where there was an administrative office settled by Hosokawa family who was the governor of Awa in the latter half of the Muromachi period(1336-1573). Miyoshi family had the base in the era of civil strife. "The Remains of Shozui castle" is a large-scale house in the Age of Civil Wars. Its excavation began in 1994. In 1999, from a certain area of the castle, the building which is thought to be used as the meeting place in the north side and the karesansui garden was found by the survey. The garden being flat garden, express karesansui. Japanese garden whose stones were made by 12 pieces.

I consider, in this paper the characteristic and the background of this designed garden.

1. はじめに

徳島県板野郡藍住町は、徳島県北東部に位置し、東は北島町、南は徳島市、西は板野町・上板町、北は鳴門市に接する。勝瑞は、藍住町の東部に位置し、吉野川水系によって形成された沖積平野上に所在する。勝瑞は、室町時代後期に阿波国守護細川氏によって守護所が置かれた所で、守護所を中心とした守護町として発達した地である。また戦国時代に細川氏に代わり阿波を支配し、畿内に進出した三好氏の本拠地ともなり、当時の阿波の政治・経済・文化の中心地として繁栄した。

「勝瑞城館跡^{しょうずいじょうかんあと}」は、勝瑞に所在する戦国大名・三好氏の大規模な居館跡で、勝瑞城館公園整備事業を契機として平成6年度から発掘整備が開始された。調査が進むにつれ、出土する遺物や検出される遺構の内容や規模、保存状態も一級品で、貴重な歴史文化遺産であるため、平成13年1月29日に国史跡に指定された。それ以後も勝瑞城館跡の保存と活用に向けて土地の公有化を進める一方、発掘調査も続けられた結果、勝瑞城館跡はさらに広範囲に広がり、平成19年2月6日に追加指定を受けた。

発掘調査の結果、「勝瑞城館跡」は、勝瑞城跡と勝瑞館跡からなることが分かり、勝瑞館跡からは、会所跡と推定される地点において、枯山水庭園が検出され、また主殿跡と推定される地点から池泉庭園が検出された。この内、平成20年度より22年度に掛けて、会所跡と枯山水庭園の整備をおこなうこととなり、筆者も勝瑞城館跡調査整備検討委

図1 勝瑞城館跡の位置図

員会専門委員の一人として参加することとなり、平成23年3月をもって一応の整備復元事業を終えることができた。そこから出土の枯山水庭園は、小規模ながら石庭風の平庭式枯山水庭園で、戦国武将館の庭園として貴重であり、ここにその状況を報告したい。

2. 勝瑞城館跡の概要

勝瑞は室町幕府の阿波守護細川氏が守護所を置いた地であり、勝瑞という地名も、戦（いくさ）での祥瑞（戦勝）を祈願して細川氏によって名付けられたと考えられており（註1）、当地の歴史は細川氏と密接な関係をもつ。

細川氏は、はじめ秋月（現板野郡土成町秋月）に守護所をおいた。この秋月から勝瑞に守護所を移したのは明応年間（1492～1501）頃といわれる。

勝瑞城跡は、現在、三好氏の菩提寺である見性寺の境内地となっている。城跡の平面形は、東西約80m、南北約60mの方形を呈する。周囲には、幅約14mの水濠が巡り、一部に土塁が残る。従来、細川氏の築いた守護所跡であり、三好氏の居城跡であるとされてきたが、平成6年より行われた発掘調査により、城跡は16世紀末に築城されたことが明らかになり、三好氏が長宗我部氏の勝瑞侵攻に備え築いた防衛拠点であったと考えられるに至った。つまり阿波国守護細川氏の守護所が置かれたのは、別の場所であったと考えられる。

一方勝瑞館跡は、勝瑞城跡の南に位置し、平成9年より

発掘調査が行われ、館跡を囲む幅約13mの濠跡や枯山水庭園とそれに伴う会所跡と見られる礎石建物跡、それに主殿跡と見られる大規模な礎石建造物と、それに伴う東西40m、南北30m以上の規模をもつ園池跡などが確認され、出土遺物の時期から、三好氏の居館跡と推定されるに至った。

3. 阿波三好氏と勝瑞

管領細川氏は、政元（1466-1507）の代に実質的に幕政を掌握したが、永正4年（1507）養子細川澄之・澄元の後継争いにより勢力が衰退するに至った（両細川の乱）。その過程で表舞台に登場してきたのが阿波三好氏である。当時三好氏は、守護代級の有力被官として、特に軍事面で阿波細川氏を支えていたが、管領細川氏の養子に迎えられた細川澄元（阿波守護成之の甥）の後見役として上洛した三好之長（1458-1520）が活躍し、「京都の成敗は万事三好にてぞ有りける」（『細川大心院記』）とまで言われるに至った。之長没後も孫元長（1501-1532）が畿内で活躍し、堺を拠点として幕府政治を左右したこともあった。元長没後もその子長慶（1522-1564）が阿波から畿内に進出し、畿内に覇権を唱えた。長慶の全盛期には、四国から畿内にかけての8ヵ国を領有する当時最大級の大名であった。

一方、長慶の実弟義賢（1526-1562）は、天文21年（1552）に、守護細川持隆を自殺に追い込み、実権を掌握、勝瑞を拠点として阿波・讃岐を支配し、畿内の長慶を支えた。しかし長慶没後の三好氏は、後継者に恵まれず、織田信長などとの戦いに敗れて畿内での覇権を失い、勝瑞にいた義賢の子長治（1553-1577）も国内の反乱に合い自決をして遂げた。三好氏は、鎌倉時代の阿波守護であった小笠原氏の後裔と伝えられる氏族で、三好郡内に居住し、その土地の名前を名乗ったのが始まりと考えられている。

阿波の西部から勝瑞へ、勝瑞から堺、京の都へと進出した三好氏は、進取の気風に富んだ戦国武将であった。管領家や阿波守護家を軍事面で支えるなど、強力な軍事力をもっていただけでなく、当時の武将の教養であった連歌や茶の湯などの文芸の世界でも知られていた。三好長慶や弟の安宅冬康が、当代一流の連歌師と交流を深め、度々連歌の会を催していたことや、三好義賢（実休）が、茶の湯の愛好者であったことが知られている。後に織田信長や豊臣秀

図2 勝瑞城館跡遺構配置図

図3 会所跡と枯山水庭園平面図

図4 勝城館跡庭園イメージ図

吉が政治的に茶の湯を利用する土台は、実休によって始まるとも言われている。

『天王寺屋會記「宗達茶湯日記他會記」』や『今井宗久茶湯日記抜書』には次のような記録がある。

『天王寺屋會記「宗達茶湯日記他會記」』（註2）

弘治二

辰十一月廿一日罷立、同廿八日ニ阿州へ着申候、同日豊州へ御礼参、茶屋ニ而暮候まで御物語承候、

御会十二月二日朝、御口切 宗達一人

一あろり しやうはり くさりにて、

一床 なすひ壺 四方盆ニ 袋かんとう おもへき

一竹茶杓 浅茅あさち

天目 けんさん 黒台 高麗かうらい茶碗 蓋 蓋 ことく

『今井宗久茶湯日記抜書』（註3）

弘治4年(1558)1月5日条

正月五日朝 物外軒御会 道陳 宗易 宗久

一 キロリ 平釜 五トクニ、

一 床 開山墨跡 肩ツキ、四方釜ニ、

一 水サシ カヘリ花、アカメネ 珠光茶ワン

一 アサチ茶杓 珠トク 水下 ホウノサキ

弘治2年(1556)11月28日に、津田宗達が勝瑞の実休を訪れて、「茶屋ニ而暮候まで」実休の物語を聞いたという記録であり、また12月2日には、宗達一人を招いて茶会を開いた記録である。この時招いた三好館は、今回発掘された勝瑞館や会所であったと思われる。

実休はその他にも今井宗久や北向道陳、千利休などの堺の商人らと、勝瑞館や後の居城となった高屋城で度々茶会を催していたようである。

『山上宗二記』の「茶湯者之傳」に、実休は「武士ニテ数奇者也」といわしめている。一点が何千貫もする当時「名物」と呼ばれた茶道具を約50点も所有していた(註4)。

出土遺物としては、土師器皿をはじめ備前焼、瀬戸美濃焼等の国産陶器や、中国陶器、瓦、銭等が大量に出土している。茶の湯に関する道具類も出土しているが、茶庭(露地)に関する手水鉢や石燈籠などは検出されておらず、こ

れらは徳島城の方に持ち運ばれたことも考えられる。

4. 作庭時期と廃絶期

勝瑞館跡は、濠に囲まれた複数の曲輪が集合する、いわゆる複郭式の形態をもつ館跡と考えられており、戦国大名クラスの居館としては最大級の規模といえる。

今回明らかになった枯山水庭園遺構は、庭園および会所の下層に、南北方面に伸びる溝が検出された。この溝が埋められた後に庭園が造営されたと考えられる。検出された溝からは大量の土師器が出土して、それらの制作年代は、16世紀後半と考えられ、これより作庭時代が16世紀後半であることが分かった。しかし礎石や景石の一部に熱を受けた痕跡があり、会所は火災によって焼失したと思われる。この火災を受けたのは、礎石を覆っていた層からの出土の遺物から、16世紀末ころと推定される。

天文22年(1553)三好義賢(実休)が、主君細川持隆を謀殺し、阿波の実権を握ってより、天正10年(1582)に土佐長宗我部氏の勝瑞侵攻があり、十河存保の勝瑞開城までの30年間、勝瑞城は三好氏の居城・居館として機能したのであったが、土佐長宗我部氏の侵攻によって、勝瑞館とともに庭園および会所は廃絶したと考えられる。三好義賢は、当時まだ確立期の段階にあった茶の湯の熱心な愛好家であったことはよく知られている。勝瑞館の庭園は、そうした文化人の雅び・わび等の美意識のもとに造られたものであると考えられる。天正13年(1582)には蜂須賀家政が阿波に入部し、徳島に城地を定め、城下町の建設を始める。その際に勝瑞館の部材が徳島城下町に使われたことが伝承として残っており、庭石等も徳島城表御殿庭園の築庭に運ばれたとも言われている。

5. 会所跡と庭園遺構

平成11年に勝瑞館跡において、会所跡と共に検出された枯山水庭園は、小振り(50～100cm)の12個の景石が使われていた。石材には、三波川変成帯に産する緑色片岩(青石)が9石、和泉砂岩2石、それにチャート1石からなる。他には抜き取られた形跡は認められず、景石は組み合わせずに単独で配置している点が特徴的である。12石は散らばっているように見えるが、会所跡から見ればまとまって見

え、観賞視点は、会所跡建物であることは明らかである。

また景石群の東西には、深さ約50cm程度の池状の落ち込みが認められるが、池の埋土には帯水状態を示す有機質粘土層の堆積は見られなかった。池状遺構の南側では、配置が不規則で堀方が不明瞭な落ち込みが確認されたが、これは植栽痕跡と考えられる。景石群の枯山水庭園の北側から見つかった会所と考えられる建物は、桁行七間、梁間四間半、身舎は五間×四間で、身舎の南側に小振りな礎石が検出され、テラスのような施設があったと想定される。

礎石は、焼けた壁土を含んだ厚さ10cm程の焼土層に覆わ

写真1 会所跡礎石と枯山水庭園

写真2 復元後の会所跡建物と枯山水庭園

れており、礎石や景石の一部に被熱痕が認められることから、会所は火災により廃絶したものと考えられる。

枯山水庭園の作庭時期については、西側の池状遺構の下からは、上幅約5mで断面がV字形を呈する菓研濠が検出

写真3 会所跡建物からの景観

され、埋土からは16世紀中葉に比定される京都系瓦が出土している。また庭園跡と会所跡の下層には、これらのほぼ中央を南北に縦断する溝が検出され、この溝からは16世紀後半に比定される京都系瓦をはじめ、大量の瓦が出土した。その他の遺物から勘案すると、作庭時期については16世紀

写真4 勝瑞城跡（現、見性寺）と濠

写真5 勝瑞館跡の池泉庭園

写真6 池泉庭園洲浜

後半に位置付けられる。その後、天正10年(1582)の長宗我部氏の勝瑞侵攻に伴い廃絶したものと推定される。

一方、主殿跡からは池庭が検出されている。園池は、東西40m以上、南北30mの範囲に広がり、出土遺物からみて16世紀中葉頃に造営され、16世紀後半に廃絶したものと推定され、本庭園も勝瑞の主である三好氏によって築かれたものであると考えられる。

池庭の特徴としては、全体的に小振りな石を用いている。緑泥片岩（青石）も用いられているが、斜めに据えられたものが多い。園池の特徴は、大きく湾曲した形をしており、「洛外洛中図屏風」に描かれている細川菅領邸庭園の園池の形状と類似しているところがある。

阿波守護であった細川成之も文化人として知られ、造園についても造詣が深かったようで、幕府より室町第の庭木選定の要請を受けたりもしている。また成之の京都の庭園も見事だったらしく、文明15年(1483)2月9日に興福寺別当の大乘院の門跡であった政覚が、成之邸を訪れ、庭園を見て激賞したとも伝わる。三好氏は細川氏の家臣であり、庭園造りも継承したのかも知れない。

枯山水庭園は小振りながら、龍安寺風の石庭が、この時代この場所に造られていることが注目され、庭園史的にも貴重なものである。本格的な枯山水庭園が、いつどこで最初に造られたかは分かっていない。龍安寺庭園や大仙院庭園、龍源院庭園などが古いものとされてきた。その様式が地方にどのように伝播していったのか。室町時代末期の戦国時代には、一乗谷朝倉氏庭園（福井市）や北畠氏館跡庭園（三重県）の築山に、枯山水様式が見られ、地方にも枯

図5 「洛外洛中図屏風」細川管領邸

図6 龍安寺庭園平面図（『日本の庭園文化』より）

山水庭園が出現したと思われるが、本庭の枯山水庭園は、平庭式の竜安寺風石庭で、この点が他の戦国時代の庭園と異なる。こうした点でも本庭の存在は、石庭風の枯山水様式が地方に伝播している古い一例として貴重な事例であると考えられる。

6. 会所・枯山水庭園の整備

発掘調査により、「勝瑞城館跡整備基本計画」（平成19年3月策定）において、史跡勝瑞城館跡の会所および枯山水庭園エリアについてその整備の基本的方向性が示された。当地はもと鉄工所敷地であったが、用地の公有化も完了した。濠、枯山水庭園、会所跡等の遺構が確認されたのを埋め戻し、その上に、濠跡の表示、枯山水庭園と会所の立体的

表示をすることとなった。遺構を損傷することのないよう遺構面と整備レベルとの差を1mとして覆土を行い整備されることになった。

枯山水庭園については、遺構の石材と類似の石材を使用して復元する。濠跡については、浸水性真砂土舗装など自然な風合いの材料を使用して、かつての濠の位置及び規模を半立体的に表示した。

会所跡についても、1mの覆土の上に、遺構の真上に礎石、柱を表示する。そして来訪者のための屋根を設け四阿としても利用できるように屋根と一部外壁を設けた立体表示とした。こうして平成23年3月には「会所及び枯山水庭園エリア」の復元整備を完了した。

7. あとがき

今回の発掘調査により勝瑞館跡では、枯山水庭園と会所跡が検出され、本殿跡からは池泉庭園が検出された。両庭は一時期併存していたと思われる。城館跡の空間構成の異なる場で、意匠・形態が異なる庭園が造られていたことは興味深い。主殿空間は「ケの空間」であり会所空間は「ハレの空間」であったと考えられる。平成22年度には、ハレの空間である会所と枯山水庭園が復元された。平成24度よりは、主殿の池泉庭園の復元が計画されている。両庭が整備完了すれば、戦国武将館跡の庭園としてその価値は一段と高いものとなるであろう。

最後に、本稿をまとめることができたのは、藍住町教育委員会発行の各種報告書や調査資料に基づくものであることを記しておく。同時に同市教育委員会には、貴重な資料の提供を得ることができた。また同市社会教育課の重見高博氏には、多くの助言を得て小稿をまとめることができた。記して感謝と御礼を申し上げる。

註1 島田泉山「勝瑞の研究」『名勝阿波』第2号1992

註2 『茶道古典全集』第7巻 淡交社 1956

註3 『古典茶道全集』第10巻 淡交社 1956

註4 米原正義『三好長慶とその周辺の文芸』1991

〔参考文献〕

『守護町勝瑞遺跡東勝地地点発掘調査概要報告書1』

藍住町教育委員会 2006

『勝瑞城館跡整備工事（第一期）』藍住町教育委員会 2008

『勝瑞館跡第15次発掘調査概要報告書』藍住町教育委員会 2011

『日本の庭園文化』西 桂 学芸出版社 2005